

金鎬貴氏のコメントに対する回答

崔恩英（韓国 金剛大学校）

まず拙論に対してコメントして頂き、ありがとうございます。問題提起と、ご指摘に対して、次のようにお答えいたします。

【問題提起について】

仏性が中道であることを説明するに当たって、仏性と涅槃との関係についての必要最小限の説明がなされるべきであるとの指摘についてお答えします。

仏性と涅槃は、最も簡単に考えれば、因果論的に捉えることができます。涅槃という果があるためには、原因がなければならぬため、仏性は因であるとの見ることができます。

しかし『大乘玄論』「仏性義」では、仏性を因、果、因果であるという既存の見解を否定しています。仏性は因にあり、性仏は果にあるものなので、因果が仏性であり、因果は性仏であると不二の意味により説明します。不二は体であり、不二は用であるため、体用が平等不二な中道がまさしく仏性です。因果を二と見るのは仏性ではないとしながら、ある一方を固執する是非の論争は、すべて仏性を喪失したものであると見ます。すなわち因果平等不二を知ってこそ、仏性であると呼ぶことができ、涅槃もそうであると言います。そして、生死と涅槃が平等不二であってこそ涅槃と名づけると説いています。

以上、仏性と涅槃に関して『大乘玄論』「仏性義」に依拠してお答えしました。吉蔵は、仏性と涅槃とを因果関係で解釈する従来の説明に反対し、平等不二の関係を悟る時、初めて仏性や涅槃であると言えると述べています。

【指摘事項について】

1と2については、原文と照らし合わせて修正したいと思います。

3については、『楞伽經』の原文と『勝鬘宝窟』の引用に違いがあることを示すた

めにわざと入れました。『勝鬘宝窟』では所取、能取という用語で記述された部分が、『楞伽經』では可取、能取となっています。ご指摘いただいたように、脚注でこれについて説明しつつ、一つに整理することにしたいと思います。

4で指摘された文章は、内容的に前に書いたものと重なりますので、括弧内の文章を修正する際にそれを反映させるようにしたいと思います。

(翻訳担当：佐藤厚)